

## 連携と交流を誘発するパブリックスペース

このホールは南側からキャンパスの中央広場を囲む建築物となり、そしてその中央広場とともにキャンパスの中心軸でもある榎並木のプロムナードにも面しています。そのためカフェスペースなどのパブリックスペースを介して街並みに積極的に参加し、大学通りや中央広場の方向へにぎわいがにじみ出るような関係をつくり出そうとしています。大学と地域の連携と交流はこのホールの基本的な目的でもあり、ホール周辺のパブリックスペースはいわばそれを促すために偶発的な出会いを積極的に生み出す仕掛けとして考えられています。ホールがガラス張りに透視できることの他にも、防音の音楽練習室もまた大きな開口をカフェコーナーに向けています。

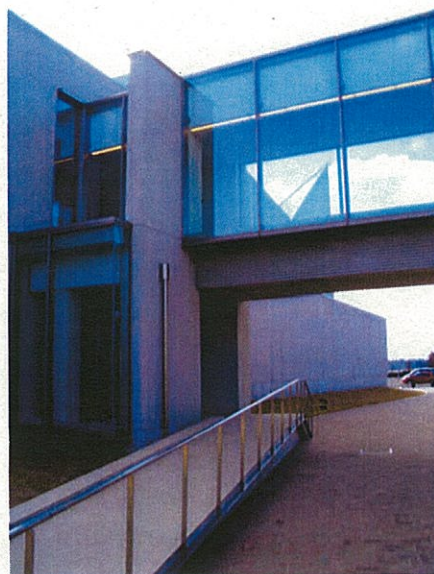


カフェコーナーからも中央広場越しにその景観を堪能できるように窓際に薄い水盤を設け、最上川と鳥海山の景観を連想させる特別な場所に仕立て上げています。その反対にプロムナード側から見た建物の表情を演出するために考案されたのがパブリックスペースの随所で使われている光壁です。商業建築を思わせるような活気ある透明性がここには必要だと考え、光壁の持つ明るく柔らかな雰囲気は内部のにぎわいをシルエットにして強調し、水盤で増幅して外部に発信する仕掛けになっています。キャンパス周辺を散策する市民にとっては市立美術館と土門拳記念館の間に位置するこの場所は絶好の休憩地点と考えられます。マスタープランのときに配置で中央広場は酒田市記念体育館のマッスと連動して緩やかに囲まれながら地域のシンボルである鳥海山の美しい姿を最もきれいに望めるようにグラウンドとの位置関係を決めました。



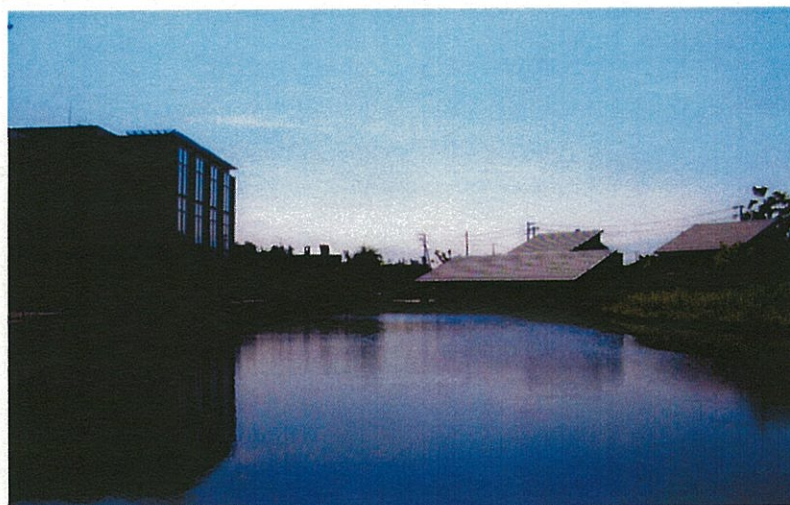
## 大学通りの街並と建築の連動

この建物の外観の存在感には他の大学施設と一体となって大学通りの街並をつくり出す事と、そのなかでも市民との交流の象徴として際立つ事の適度なバランスが求められたと言って良いと思います。大学構想のマスタープランにおいても既存の周辺施設との調和を考えて淡いグレーを基調にしながら、庄内平野が秋になると美しく染まる稲穂の色を意識した煉瓦の素材をアクセントとしました。それは環境性能を意識した外断熱の建物としての押し出し成形セメント板とともに主要な外装材として選択されています。新しくできたホールにも同じ素材が継承されつつ、他では使っていない独自の白い左官材のもつ壁と混ざり合うようになっています。そして街並のような集合体を意識して造って来たマスタープランを更に展開するために、ホールの外観は一つの建物ではなく幾つもの建物の断片が折り重なり融合しているかのような表情を持たせています。つまり大学施設とともに多様な部分がそれぞれに主張しつつも調和しているような関係を目標としていると言えるでしょう。そのために取り込まれたのが微妙な角度のずれです。ホールの音響上平行な面を避けたい事をどのように処理しようかと思案していた頃に、マスタープランで校舎の間につけた角度、そしてホールの前でほんのわずかカーブする大学通りにあわせた南側駐車場の角度はそれぞれ5度ずれてている事を積極的に扱う事にしました。



## 鶴岡タウンキャンパスの計画

鶴岡タウンキャンパスでも大学街の形成や積極的に開放したキャンパス空間のコンセプトは基本的に同一だと考えました。特にこちら側は鶴岡公園という鶴岡城址の歴史的な景観資産を継承しながら、古い城下町を環境の時代の都市空間とした教育文化施設の創出を目指しました。マスタープランの上での最大の特徴は野球場になっていたこの敷地に戦前まであったお城の壕の景観を復活する事でした。百軒堀と呼ばれていた往事の姿には遠く及びませんがピオトープとして再生された池の周囲につくられた様々な水辺は公園の一部として誰もが楽しむことができ、水面にデッキを張り出したレストラン棟は今やすっかり観光名所になっています。修景池とは反対側には藩校致道館をはじめ鶴岡市中心部の主要な歴史的保存建物があるだけでなく文化教育施設を集約的に配置しようとしているシンボルロードです。城下町らしい落ち着いた風情を求めて、くすんだ板塀のような灰褐色の色調とガラスで表情をつくりつつ建物の配置と大きさに特に注意を払いました。慶応義塾先端生命研究センターの3階建部分と東北公益大学の大学院として2期工事となった2階建部分によってシンボルロードに面した中央広場を緩やかにとり囲む基本形式は酒田キャンパスと共通です。第1期工事の部分でもあえて2つのボリュームに分解されて透過性の高い空間を間にはさみ、慶応義塾、東北公益文科大学、そして鶴岡市の3者で共同運営、利用する生命科学を中心にした致道ライブラリーと呼ばれる図書施設にして、ここでも教育研究機関の一部を開放しました。

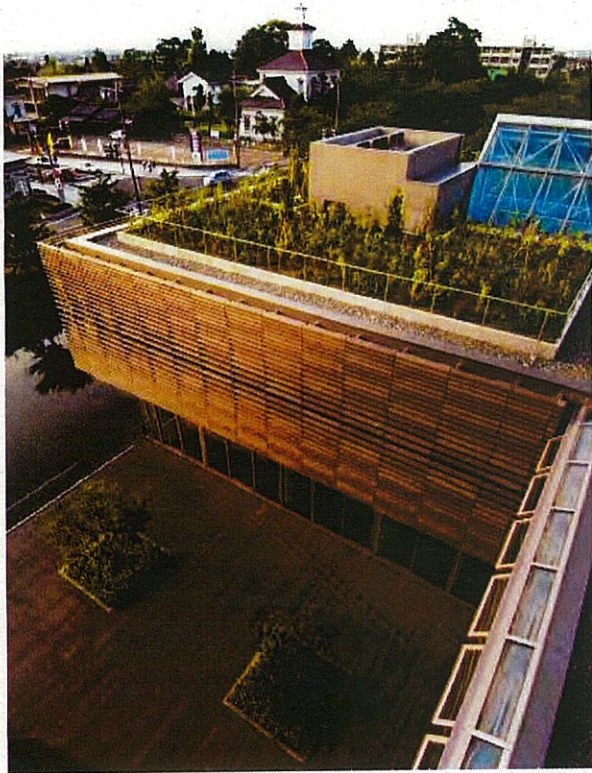


## 公益ギャラリーと鶴岡キャンパス大学院棟

4年を隔てた1期と2期の建物の関係にこのデザインの本質的な部分が現れていると言ってもいいかもしれません。当初からの平面的なボリューム配置は一貫して変わらなかったものの、それぞれの表情については単調になる事を避け、統一感を失わないようにしつつ明確な差異をつくり出したいと思いました。水辺にたたずむ研究スペースの石貼りのボリュームと市民に開かれた致道ライブラリーのガラスボックスを明解に組み合わせた構成を継承し、スロープを内包したガラスボックスの展示ギャラリーと水上に持ち出されたセラミックルーバーのマッセで対応しています。お壕を縁取る石垣の連続のように、重厚な輪郭線が水辺から浮かび上がる基壇のように感じられるように、1期では城下町らしい色合いの石の色、2期ではその色に揃えたセラミックルーバーにしました、ガラスボックスの奥に回転する木パネルの暖かな色合いが表情を作り出す手法は2期ではガラスカーテンウォールの木製マリオンとして同じ表現を使いつつ組み合わせを変えています。それによって呼応し合い緩やかに連動する全体構成にしたいと考えたのです。修景池に面したピロティ空間上に持ち上げられたライブラリーの象徴的なガラスボックスに連続して広場側に低く細長く伸びるガラスの回廊空間は両端にエントランスを持っています。雪の多い冬期への配慮とともにレベル差も解決することで公園内の回遊動線の一部になる効果を期待しました。



この配置は鶴岡城と同じ城下町独特の伝統的景観計画手法である山当てを踏襲しており、南側の金峰山と北側の鳥海山を結ぶ軸線に沿っています。特に金峰山は建物の中からだけでなく、シンボルロードからは致道ライブラリーのガラスの箱を透して見せることにもなります。第2期工事となった大学院は道路にも近いことからさらに低く抑えつつ、その場所は水辺と建物ボリューム屋上が、一体の構成としてまとまった姿が見えるだけの空間的余裕を活かして中低木で屋上緑化した大地と融合した建築物とすることにしました。ちょうど鶴岡城のお堀の直線的な石垣のうえに覆いかぶさる桜並木のように、人工的構造物と自然が調和した表情を積極的に作り出したいと思いました。



この空間を公益コリドールと呼んで単なる移動空間ではなく大学院の研究活動を広報活動するための常設の展示ギャラリーであると同時に一般市民との交流施設であると位置づけました。展示空間と考えたときスロープの勾配でとられたその長さがむしろ有利になり、このスロープが水面レベル、広場レベル、大学院棟の2階レベル、そしてライブラリーのレベルと半階ずつずれたレベル差のある空間を緩やかにつなぐことで、広場を巡る2層の空間が立体的に連続する効果が得られます。この公益コリドールに面して学生ラウンジや教室をガラスで仕切られたショーウィンドーのように配置する事で研究活動そのものも垣間見せています。こうして鳥海山へ向かう鶴岡の歴史的基準軸を致道ライブラリーへと向かうスロープが視覚的に明示された外観によって地域に開かれたキャンパスの顔としての役割を果たすことを意図した設計にしました。

